

# 卒業生からのメッセージ

第7号は、看護師や保健師の資格を持ち病院で勤務する傍ら、海外青年協力隊のメンバーとして西アフリカのベナンに渡り、母子保健サービスに従事経験のある野澤咲希さんからのメッセージをお届けします。今回は第1号、2号に続き森井校長先生からの紹介です。



## 《高校生時代の事》

私は高校生時代、バスケ部に所属していてほぼ毎日が部活中心の生活でした。バスケ部でした走るのが嫌いなので練習は好きではなかったです。つらいこともありましたが、諦めずに続けた部活の経験のおかげで精神的にも強くなったと大人になってから実感しています。勉強に関しては、理系にもかかわらず数学・化学は苦手でしたが、“理解できる”ことや“解ける”ことで達成感を得ていたので勉強すること自体は好きでした。協力隊の試験を受けるにあたってTOEIC や英検等での一定基準をクリアしている必要がありますが、私は高校生時代に取得した英検 2 級で協力隊試験を受験しました。あの頃は将来役立つとも思っていませんでしたが取れる時に取っておいてよかったなあと思っています。

## 《進路の選択》

私は中学生の頃に中津川市の国際交流事業でタイ研修に参加した経験から、将来は『人の命に関わる仕事で国際協力に携わりたい』と思っていました。同時に、海外の文化や宗教・生活習慣にもとても興味を持つようになりました。高校生時代の進路選択では、医療系の道に進むのか、広く世界の情勢や諸問題を学べる国際関係学という分野を学びに進学するのか迷った時期もありました。結果として私の根底にあったのが『人の命に関わる仕事で国際協力』だったこと、そして現地の人々の最も近くで活動したいと思った時に、そのイメージができたのが看護師だったので看護師になることを決めました。今思えば看護師以外にも私の目的を達成するための職業はもっとたくさんあったと思いますが、当時の私は『人の命に関わる仕事＝医療系』で学力や実務的な面でも看護師かな？と思っていた部分もあり看護師になりました。今は看護師に



なって良かったと思っていますが、もし高校生の頃にもっと多くの職業選択について考えていたら、違う職業に就いていたかもしれません。ただ言えることは、進路選択や職業選択において、その大学に行くことやその職業に就くことは目的ではなく、その大学に行って、又はその職業に就いて何をするかだと個人的には思います。私の場合は看護師になったことも協力隊への参加も目標の1つでしかなく、看護師・保健師の資格を使って国際協力に携わること、そして海外で生活し、その地域の文化や生活を知ることがやりたい事です。今後もそこを見失わないように、今は日本で経験を積んで、知識や技術を培っていけたらと思っています。

悩むことも多い高校生活だと思いますが、皆さんの充実した生活を願っています。

## 《私の仕事》

私は中津高校を卒業後、長野県の大学に進学し看護師と保健師の資格を取得しました。そのまま長野県内の病院の手術室で5年間勤務し、一旦仕事を休職して2019年7月からJICA海外協力隊として西アフリカにある『ベナン共和国』という国に派遣されました。コロナウイルスの世界的流行により今年3月に帰国を余儀なくされ、現在は休職していた病院に戻り集中治療室で働いています。

## 《集中治療室勤務に関して》

現在勤務している集中治療室では、手術後の患者さんからそうでない内科的治療を行う患者さんまで病態や治療は多岐にわたります。疾患や治療法、その中で出来る看護を幅広く学ぶことができるという点は集中治療室で働く1つの魅力かもしれません。一方で集中的な治療を要する患者さんが入院している部署でもあるため、患者さんの病態的にも厳しく、神経をすり減らしながら日々働かざるを得ないのも事実です。しかし徐々に病態が良くなり集中治療室から一般病棟へ移っていける患者さんや、私達が行う看護で良くなる患者さんを見ると、看護師の仕事にやりがいを感じます。



<私が暮らしていた地域の風景です。>



<道端には常に家畜がいます。  
こんな道を毎日通って活動に行っていました。>

## 《アフリカ生活・協力隊活動について》



ベナンでは、アボメー市という地方の町で1人暮らしをしながら、地域の保健センターで看護師として活動していました。インターネットで調べればある程度のことは分かる日本とは異なり、人に聞くことや自分で経験してみないと分からないことばかりのベナン生活は毎日が刺激的でしたが苦勞も多い日々でした。この食べ物は何なのか、どこに行けば野菜が買えるのか、水道代や電気代はどこでどのように支払うのか、タクシー乗り場はどこにあるの

か、そんなことすら分からず、1から10まで周囲のベナン人に聞いて助けてもらっていました。『1人じゃ生きられないから周りに助けてもらいながら生きればいい』ことを改めて実感し続けた日々でした。毎朝手洗いで洗濯をして、赤土の道を家畜達と歩き、地域の人達に挨拶しながら保健センターに行き、伝わったり伝わらなかったりのフランス語と現地語で利用者さん達と話し、毎日の停電や断水と戦い、道端でよく分からない食べ物を買って地域の人達と食べる、そんな日本では出来ない経験を数多く経験できるのが、地域住民と共に生活し活動する協力隊の醍醐味だったと思います。

保健センターでは主に母子保健サービスに関する活動を行っていました。世界的に見ても妊産婦死亡率（妊娠出産に関わる女性の死）や新生児・乳幼児・5歳未満児死亡率の高いベナンでは、これらに関連する様々な課題解決に向けて取り組むことが求められています。実際には私は保健センターで行われる乳幼児の予防接種の支援や、予防接種や妊婦健診に来る住民を対象に栄養に関する啓発活動を行っていました。また、私が暮らし活動する地域はどのような地域なのか、どのような健康問題が多いのか、地域住民はどのような暮らしをしているのか、そんなことを知るのも重要な活動の1つだったので、地域を歩き回り、出会う人達と雑談をしながら情報収集をしていました。日本で設備の整った病院での看護師経験しかなかった私には、生活と共に協力隊活動においても初体験のことが多くありました。



Au revoir  
オルボワール  
(バイバーイ!)

最後までご覧いただきありがとうございました。